

変化の結果を表すニ・トについて

菊池律之

キーワード：変化の結果を表すニ・ト、トの本質、同一視・認定

0. はじめに 一問題提起および本稿の目的一

日本語において、以下の例に見られるようにニ・トは多くの状況で交替を許容する。

- (1) 太郎は大学を卒業したあと、プロ野球選手 {に／と} になった。
- (2) 今日、渋谷のハチ公前で、花子 {に／と} 会う予定なんだ。
- (3) 今回の作品は、前回 {に／と} 比べて冴えが見られないね。

本稿では、(1) のような、いわゆる変化の結果を表すニ・トをとりあげ、その意味的な相違を探る。

これまで、先行研究においては、この二種のマーカーを「変化の結果」という同じ枠組みに分類し、その中での意味的な相違を論じるという扱い方が主であった。しかし、

- (4) タヌキが茶釜 {に／*と} 化ける。
- (5) クラーク・ケントがスーパーマン {に／*と} 変身する。

のような、名詞句結果語をとっていながらも、ニしか許容しない例や、また、

- (6) 楽しいはずの夏祭りは一転、修羅場 {*に／と} 化した。

のような、トしか許容しない例についての説明としては不十分な点も多く、比較的容易に反例を見出しうる。現代日本語を観察するとき、このニ・トの違いは、文体差、あるいは格式ばった感じを与えるかどうか、という「ニュアンスの違い」しか持たないのではいかと考える。

本稿では、後に述べるように、いわゆる変化の結果のトの出現状況や、述語動詞句を省略した場合のニ・トのもたらす解釈の相違などから、結果のトは存在しない、そして、トはいうなれば補足的・例外的に結果の意味を表しうるもの、ということを検証する。

1. 先行研究

1. 1. 松尾捨治郎

松尾（1936）は、結果のニ／トの使い分けに関して結果語を補足語に含まれるものとしたうえで、次のように述べている。

…自分は奈行音は柔かであるから、には自然的變移 永久的化成 の意を生じ、多行音は強いから、作爲的變化 一時的化成 の意を現すものと考へる。

（p. 198 下線および仮名遣いは原文のまま）

ここで、ニはナ行で、柔らかい感じがするから自然的変移・永久的化成で、トはタ行で強い感じがあるから作爲的变化・一時的化成と考える、という指摘には、それぞれの音から感じられる「語感」以外の根拠は提示されていない。それに、柔らかい感じと自然的変移・永久的化成、強い感じと作爲的变化・一時的化成がなぜ結び付くのか、についての説明もなされてはいない。

この松尾の指摘をもとに上に挙げた例文を検討してみる。

（1）に関しては、太郎が「自然に」プロ野球選手になったのでもなければ、「永久に」プロ野球選手でい続けるのでもなく、いつかはプロ野球選手でなくなる日も来るわけで、少なくともニの説明としては当てはまるまい。

ニしか許容しない（4）（5）の結果語である茶釜、スーパーマンは、タヌキ、クラーク・ケントがそれぞれ「自然に」変化したのではなく、むしろ「作爲的に」変化したものと考えるべきであり、またこれらは永久に結果の状態でい続けるのではなく、それぞれもとの状態であるタヌキ、クラーク・ケントに戻ることも予想される。

1. 2. 田中章夫

田中(1977)は、ニについて、「動作の向けられる対象、行為の目ざす目的、あるいは作用の出所といったものが、それであり、こうしたものを導いて来て、「ニ」は行為・動作の表現を支える。」と述べた上で、「移動性ないし経過性の動作・作用の場合も同じであり、そうした動作・作用の場を構成する諸要素、すなわち起点・帰着点あるいは、時期・期間・機会・なりゆき・結果などを示す。」(下線;筆者)として、

(7) 液体から気体が変わる。

の例を挙げている。

また、トについては、「変化の結果や帰着点を示す用法も見られる。」として、

(8) 天候が一変して暴風雨となる。

(9) 交通事故で廃人と化する。 ((7)~(9)は田中(1977)より)

などの例を挙げている。

そしてさらに、「「暴風雨ニなる」の場合は、次第に暴風雨という結果にいたった、あるいは、自然にそうなったという意味合いであり、一方、「暴風雨トなる」には、「一転して暴風雨が吹き荒れる」といった気持ちがある。すなわち、「ニ」は、徐々に、自然に変化した結果を示すのに対して、「ト」は、転化を示すといえる。したがって「災い転じて福トなす」の「ト」は「ニ」に置き換えられないし、「大人ニなる」の「ニ」は「ト」に置き換えられない。」と述べている。

ここで、ニに関する「自然に変化した結果を示す」、およびトに関する「転化を示す」という指摘は、一部、松尾(1936)と共通するものと見てよからう。

トの「転化」を、ニの「徐々に、自然に変化した結果」に対するものとして「急激に変化した」と解釈する(注1)ならば、(4)および(5)の、ニを用いたほうこそが「転化」であり(タヌキから茶釜への、クラーク・ケントからスーパーマンへの、それぞれの変化は、一瞬のうちに行われることであるので)、この点で田中の指摘とまったく相反することになってしまう。

また、(1)について考えて見ると、二のほうは太郎が徐々に、自然にプロ野球選手になったということで、bは太郎が突然プロ野球選手になった、という解釈になるのだろうが、現実的にそのようなことがあるだろうか。

1. 3. 森田良行

森田(1980)は、二について「化成の結果を示す」とし、「「CヲDニする／CガDニなる」文型をとって、CがDに移行変化したり、Dの立場に移ることを表す。」と述べている。そして、

- (10) 先生が父に見える
- (11) 息子を奉公に出す
- (12) 娘を嫁にやる
- (13) 娘が嫁に行く
- (14) 養子に迎える
- (15) キツネが女に化ける
- (16) 比較的割安の弁当を昼食用に買っていく

などの例を示し、「息子や娘、駅弁が「に」で指示される内容“奉公、嫁、昼食用”へと移行するのである。」と説明している。

また、

- (17) 着物が米になった
- (18) 金になる商売
- (19) 今度、社長は田中氏になりました
- (20) 信号が青になってから横断しなさい
- (21) 試験は火曜日になりました

などの例を挙げ、「他への交換・交替・変換・変更あるいは新規に決定など、それ以前の状態の否定を前提とした新しい事態の誕生を表す」と述べている。

トについては、「発展変形の結果」として、

(22) 私生活が小説となるなんて、いい商売だね

(23) 災い変じて福となる

(24) 桑田変じて蒼海となる ((10)~(24)はいずれも森田(1980)より)

などを挙げ、「それ自体が他のものにとって代わったのではない。以前の状態が発展して別の状態・事柄へと変形したにすぎない。その源を認め、それ自体は以後も変わらず続いているのだが、ただ表向きの状態が形を変えたとの意識である。「災い」そのものは引き継がれているのだが、それを受け手が「福」として受け取るようになす、の意である。」と説明している。

さらに森田は、「CガDニ／トなる」「CヲDニ／トする」文型において、「に」はCからDへの変化の帰着点を表し、「と」はC自体は消滅せずに存続して、Dと一つになる(C→←D)合一作用を表すと、ニ／トの違いを述べている。

森田は、二の意味として、「「CヲDニする／CガDニなる」文型をとって、CがDに移行変化したり、Dの立場に移ることを表す。」「他への交換・交替・変換・変更あるいは新規に決定など、それ以前の状態の否定を前提とした新しい事態の誕生を表す」と述べているが、この二つの指摘はどう関係するのだろうか。また、「新しい事態の誕生」というのは、変化主体にとってなのか、それとも変化主体を含めた叙述内容全体にとってなのか、ということも例文を見た限りではよく分からない。

トについても、「それ自体が他の者にとって代わったのではない。…それ自体は以後も変わらず続いているのだが、ただ表向きの状態が形を変えた」といっているが、「災い」は「転じて」「福」になったわけで、「災い」という状態はなくなったと考えるのが妥当ではないのか。同様に「桑田」も「変じて」「蒼海」になったわけで、この変化の後に「桑田」という状態が存在しているとは考えられない。

1. 4. 朴在権

朴(1988)は、「二なる」と「トなる」という、述語動詞句に「なる」を用いた場合のニ・トの「微妙な意味の差について」考察している。朴は「評価(注2)の有無こそ両用

法の差である」と述べ、「トなる」は話し手（または書き手）がその変化の結果を評価している場合—従って、変化の結果そのものはふつう客観的なことであるが、評価の段階では主観が働いて強調的な意味を帯びることになる—に、「ニなる」はそうでない場合—すなわち、単純に客観的な変化の結果その事実を叙述する場合に使われる」としている。

朴は、前項名詞（結果語）の性質によってグループ分けをし、さらに述語動詞句「なる」と共起する文末表現（可能表現、仮定表現、テイルの附加）などの整理から、「ニなる」は変化の結果その事実だけを叙述する場合に用いられ、「トなる」は、その変化の結果に評価・強調の気持ちがある場合に用いられる、という結論を導いている。

ここで朴は、「ニなる」が用いられる「変化の結果その事実だけを叙述する場合」の代表例として「自然的・無人為的な変化」を挙げているが、これは、松尾（1970）のニに関する指摘と共通するものである。

朴の考察は、細かな実例の分析に裏付けられたもので、その意義を認めることができる。だが、ここで、ニが「単純に客観的な変化の結果その事実を叙述するのに用いられる」という指摘はさておき、朴自身も言及していることではあるが、トを用いる際に、「評価」の基準をどこに求めるのかという点に疑問が残る。話し手によって評価の基準が異なる可能性は十分にあるし、変化の結果を評価している場合にニを用いてはならないのか、という点にも確実さを欠くように思われる。

(25) 今回の水害で、6人が行方不明となりました。

(26) 日航機墜落事故で520人が犠牲となった。

上の例が、変化の結果を「評価」しているものだとはいえず、まず考えられまい。この例を見る限り、ここで朴の提示する議論は「傾向」程度のものであるかもしれないが、変化の結果のニ・トの違いを明確に示すものではない、と言わざるを得ない。

2. いわゆる「結果のト」

先行研究が示すとおり、従来、トは、ニと並び、結果を表すものとして扱われてきた。本節ではそれを再検証する。

2. 1. いわゆる「結果のト」の存在に対する疑問

ここでは、変化動詞句と共起しながらもニ・ト相互に置き換えができないオノマトペ＋ニ・トの観察、いわゆる結果を表すマーカーとしてのトの出現状況、および変化動詞文に現れるトが、述語動詞句を削除した文においても結果の読みを許容するか、つまり述語である変化動詞句に頼らずに結果の読みを許容することができるかどうか、のテストから、トには、本来的には結果を表す機能はない、ということを提示する。

2. 1. 1. 交替しないニとト

ここでは、結果のニをトに置き換えると、明らかに意味が変わってしまう、すなわち交替できないニ／トの例を提示する。

(27) a アイスクリームがどろどろに溶けた。

b アイスクリームがどろどろと溶けた。

(27) a、bを比べると、明らかに意味が異なるのが分かる。aの「どろどろに」が、アイスクリームが溶けた結果の状態（溶けてどうなったか）を表すのに対し、bの「どろどろと」は、アイスクリームが溶ける、その変化の様態（どのように溶けたか）を表している。

また、(27) a、bを声に出して読んでみると、「どろどろに」「どろどろと」のアクセントが異なることに気づく。これは、ニを用いたほうとトを用いた方が異なる成分であるということが、アクセントに反映されたものであると考えられる。

さらに、「どろどろと」のトが省略可能なものであるのに対し、「どろどろに」のニは省略が許されない。

このようなふるまいの違いは、ここで挙げた「どろどろに」「どろどろと」が異なる成分であること、ひいてはこの例におけるニとトが異なる成分であることの証左として挙げられよう。

2. 1. 2. いわゆる「結果のト」の分布

(4)～(6)で見たように、結果のニ・トのいずれを取るか、ということは述語に現

れる変化動詞句の制約を受けるようである。ここで、ほとんどの結果成分が二をとり、(4) (5) のように結果の二しか許容しない動詞もあるなかで、いわゆる結果の二しか許容しない例は、

- (6) 楽しいはずの夏祭りは一転、修羅場 { *に / と } 化した。 (瞬)
(28) 災いを転じて福 { *に / と } なす。

のような、やや「古めかしい」ニュアンスのあるほんの一部の動詞に限られる。

また、典型的な変化動詞とは考えられない述語動詞句と共起する結果表現はすべて二をとり、トをとるものはない。

- (29) 大豆を粉 { に / * と } ひく。
(30) 田中さんが課長 { に / * と } 昇進した。

ここで、(6) (28) のような、トとしか共起しない動詞を例外的(注3)なものと考えれば、結果を表すマーカの主たるものは二である、すなわち結果の成分は「はじめに二ありき」であって、トにはほかに本来の意味があり、いうなれば例外的・補助的に結果の意味を表すのだ、という解釈も成り立つのではないか、と考えられる。

2. 1. 3. 述語動詞がない場合の解釈テスト

トが結果を表しにくいということは、次の「述語動詞を除外した場合の解釈テスト」からもうかがえるかと思われる。二・トそれぞれに細かい意味の違いがあったとしても、その機能の一つとして「結果を表す」という点で共通しているのであれば、述語動詞がなくても結果の読みを許容し得るはずである。そのことを、以下、実際のテストによって検証してみる。

- (31) a 小淵氏が首相になる。
b 「小淵氏が首相に」 ← 【なる / 相談する / 殴られる etc. 】
c 小淵氏が首相となる。
d 「小淵氏が首相と」 ← 【 *なる / ゴルフをする / 喧嘩する / 】

(31) a、c の、結果のニとトを置換した文から述語動詞句を省略して、(31) b、d のようにした（新聞や雑誌の見出し風にした）ものを見較べた場合、b のニが、小淵氏がこれから首相になる、あるいは既に首相になった、その変化の結果を想起させ得るのに対し、d では、その読みができない。強いて (31) d のトを解釈するならば、「と一緒に」の読み、あるいは相互動作の相手の読み、ぐらいのものである。つまり、(31) c では結果の読みを許容するのに対し、(31) d では、結果の読み、すなわち「小淵氏」と「首相」が同一対象を指すという解釈は成り立たない。むしろ、(31) b も、結果の読みとともに、動作の相手、受け身の動作者など、ニがもつほかの意味役割の読みを許容することがあるが、これは〈…が…ニ〉構文をとるほかの動詞もあるということによって説明づけられよう。

つまり、この現象は、結果のニ・トを含む述語動詞を省略した場合、選択肢の一つとしても、結果の読みができるかどうか、の違いを示している。ここで、トには述語動詞を省略した場合、結果の読みは許容できないということがわかった。これは、言い換えれば、変化動詞と共起し、そのうえで述語動詞句に頼らなければトは結果の読みをもつことはできないということである。

2. 2. なぜトに結果の読みができるのか

このように見ると、トには本来結果を表す機能はないのではないかということが考えられる。しかしそうすると、当然のことながら、本来的に結果の意味を持たないトが、(1) のように、文によっては結果を表し得る、その要因は何なのかという疑問が生じてくる。

本稿では、本来結果の意味をもたないはずのトが結果の読みを許容し得る理由を、「述語である変化動詞句の特性」によるものと説明する。

変化動詞文において、結果を表す成分は述語動詞句の直前に現れる。つまりそれは、変化動詞文が結果表現を伴う場合、それは必ず述語動詞句の直前に現れるということである。よって、その成分がニであろうとトであろうと「結果」という解釈に違いは生じない、と考えるのである。(注4)

3. トの本質

「結果のト」が存在せず、トは補足的、例外的に結果の意味を持ちうると考えると、では、トの持つ意味は何なのか、ということが問題になる。

3. 1. ニへの置換

ここでは、典型的に結果を表すニには置き換えられないトの検証から、トの意味を考えてみたい。

(33) a、bを実数とする。以下の問いに答えよ。 (数学教科中の問い)

上の例で、トをニに置き変えると、この文脈においては許容度が明らかに下がる。

(34) ?? a、bを実数にする。以下の問いに答えよ。

この二文における許容度の差をもたらしたものは何か。

(33) は、この問題を解くための手掛かり・前提として、aとbを仮に実数と見なす、という意の文である。ところが、(34)では、その読みができない。このことは、動詞「する」を、「仮定する」のような、話者の思考や判断の内容を表すものに変えてみるとよりはっきりする。

(35) a、bを実数と {仮定する／定める／考える}。

(36) * a、bを実数に {仮定する／定める／考える}。

以下の例についても同様のことがうかがえる。

(37) (待ち合わせの時間は既に過ぎたのに、遅刻常習犯の彼がまだ来ない)

a 彼は寝坊したものとします。先に出発しましょう。

?? b 彼は寝坊したものにします。先に出発しましょう。

(38) 彼は寝坊したものと見なします。先に出発しましょう。

(39) 契約更改に臨んだ鈴木選手は、球団の2億円の提示を不服{*に／と}した。

このように、トには、「あるものを別なものと同一視する、あるものを別なものと認定する」とでもいうべき意味があるのではないだろうか。(注5)この考えに沿って上の例を考えるならば、既に(33)は(35)、(37) aは(38)のように書き換えられたし、また(39)は以下のように書き換えられよう。

(40) 契約更改に臨んだ鈴木選手は、球団の2億円の提示を不服と
{思った／考えた}。

この「認定」の意味は、二にはないものであるので、(33)の例におけるトが二とは置き換えられない理由になっていると考えられる。

そして、このような「認定・同一視」の成分は、変化の結果と同様に述語動詞句の直前に現れるので、動詞「する」などと共起した場合に結果の読みを許容すると考えられる。

3. 2. 「引用のト」との関連

ところで、「話者の思考や判断の内容を提示する」用法として思いつくのが、「引用」のトであるが、上で挙げた、二には置き換えられないトは、果たして引用のトと考えてよいのだろうか。

(33)～(39)のような、主に「する」と共起するトが、引用のトであるか否かという議論については、「引用」というものをどのように定義づけるか、や「引用動詞」をどこからどこまでと考えるか、の問題がかかわってくる。本稿ではそこまで立ち入っての考察はしないし、また、この認定のトと引用のトの共通点、及び差異を明らかにするためには、まだもう少し道具立てが必要なようであるので、引用のトとの連続性を考慮に入れつつ、今後の課題としたい。

【注】

1：田中（1977）には、トの「転化」に関する詳しい説明はなされていないが、文脈から、また、ニの「自然に変化した結果」という指摘との対応から、「急激に変化した結果」と解釈する。

2：「評価とはある客観的なこと—行動・資格・体質など—に対して話者が主観的な判断を下すことで、〔+、-〕の両面があるろうが、ここで只評価という場合は、〔+〕評価のことである。」

（朴（1988）注より、下線筆者）

3：（5）（11）については、「化す」「なす」という、やや古めかしい印象のある動詞との共起例であることから、トの通時的な変遷にも目を向ける必要があると思われる。また、これは、いわゆる結果のニ／トの交替を許す文において、トを用いた文がなんとなく格式ばった、「いくぶん古い感がある」ということと無縁ではあるまいが、小論では例外的なものとして扱うにとどめる。

4：先に述べたオノマトペ+トについては、述語動詞句の前に現れても、「なる／する」を除いて結果の読みを許容しにくい、これはなぜ「なる／する」と共起するオノマトペ+ニ・トだけがそろうって結果を表しうるか、ひいては「なる／する」と他の変化動詞句の間にどのような意味的／統語的な相違があるか、などととも改めて検証する必要があるであろう。本稿では述語動詞句の直前に現れても結果の読みを持たないものについては態度を保留する。

5：山梨（1995）には、結果にかかわる日本語の「に」は、「と」にパラフレーズすることも可能である、ということ

①そのホテルは灰燼（に／と）爛した。

②彼はその道の達人（に／と）なった。

などを例に述べているが、同時に

ただし、認知的にみた場合の「と」の存在理由は、やはり「に」とはことなる。①、②のタイプの「と」は、「AをBとみなす」、「AをBとして理解する」等の例にみられるように、基本的には〈同定〉の意味（すなわち、ある存在を何々と認定する（見立てる、等）の意味）として解釈される。この点で、①、②のタイプの「と」と「に」の認知的意味はことなる。

と指摘している。トの基本的な意味として〈同定〉を挙げた点に関して、小論と山梨（1995）は、立場を同じくしている、と考えてよい。

《参考文献》

- 池上 嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法 ーダとノーー』 くろしお出版
- 郭 勝華 (1989) 「格助詞「に」と「と」との違い」 『言文』 37 福島大学国語学国文学会
- 金子 弘 (1986) 「格助詞「に」の用法分類」 『文芸研究』 113 日本文芸研究会
- 菊池 律之 (1997) 「いわゆる結果を表すマーカーについて」 筑波大学修士論文
- 国立国語研究所[宮島 達夫] (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
- 砂川有里子 (1987) 「引用文の構造と機能 ー引用文の3つの類型についてー」
『文藝言語研究 言語篇』 筑波大学文芸・言語学系
- 田中 章夫 (1977) 「助詞(3)」 『岩波講座 日本語7 文法Ⅱ』 岩波書店
- 寺村 秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
- 仁田 義雄 (1983) 「結果の副詞とその周辺 ー語彙論的統語論の姿勢からー」
渡辺実(編)『副用語の研究』 明治書院
- 藤田 保幸 (1988) 「「引用論」の視界」 『日本語学』 7-9
- 朴 在權 (1988) 「変化の結果を表わす「ニなる」と「トなる」について ー賦田鶴の駁ー」
『中央大學國文』 31 中央大学国文学会
- 益岡 隆志・田窪 行則 (1992) 『基礎日本語文法 ー改訂版ー』 くろしお出版
- 松尾捨治郎 (1936) 『国語法論攷』 白帝社 (今回参照したのは追補版1970)
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
- 森田 良行 (1980) 『基礎日本語2』 角川書店
- 山梨 正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房
- 渡辺実(編) (1983) 『副用語の研究』 明治書院